適性検査Ⅰ

注意

1 問題は**3ページ**にわたって印刷してあります。
2 検査時間は**四十五分間**で、終わりは**午前十時十五分**です。
3 声を出して読んではいけません。
4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立白鷗高等学校附属中学校

次の文章を読んであとの問題に答えなさい。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕があります。）

日本文化の中心にあって表現として古い時代から最も人々に尊崇されてきたのは和歌です。この和歌の世界では早い時期から花が愛され、花という言葉も大事なものとして使われてきました。

たとえば日本の七、八世紀ころの詩を集大成した『万葉集』の中にも花はたくさん出てきます。とりわけ大切にされたのは、梅の花でした。梅が中国から輸入されたのは『万葉集』が作られた時期よりちょっと前のことですが、梅の花がひじょうに愛され、尊敬される木としてうたわれているわけです。

梅が大切にされた理由は、一つには香りが高い、もう一つには春を告げる最初の木ということがあげられるでしょう。当時はどこにでも生えているわけではなくて、移植されて奈良、大和一帯の貴族の邸宅などに植えられたと思いますが、そういう梅の木をながめながら、冬の季節がまだ終わっていないのに、もうあの木は花が一つ咲いたよ、二つ咲いたよ、とうたっているのです。春を待ちかねている人々にとって、梅は素晴らしい花だったのです。古代の日本人は、冬を通り越してまた春に甦った自分たちの命を最初に称えてくれる花として、梅を見ていたわけです。しかも比喩的に見るのではなくて、花を見ているうちに、本当にこれは人間の命とそっくりだという風に思ったのだと思います。

ところが、これが平安時代の特に後半になりますと、梅の位置が少し後ろへ下がっていきます。では、何が前面に出てきたかというと、桜です。その当時はもちろん、われわれがいま見ている「ソメイヨシノ」などはなく、山桜が主体でしたから、豪勢に咲いて豪勢に散る、という風情とは違っていたと思いますが、いずれにしても冬から春にかけての最初の花である梅から春風駘蕩とした晩春の時期の桜へと関心が移っていったところが、面白い点です。

この変化はとても面白い問題を含んでいると思いますが、私は、花の咲く時期が影響したと考えています。梅は寒い時期に咲き、それが素晴らしいのですが、この花を実際に見に行くとなると、かなり億劫なわけです。ところが、桜の花の時期というのは晩春ですから、体の内側からも暖かくなって、人々は外へ出たくなるのです。そして出ていったら、桜の花が咲いていた。素晴らしい。ごく季節的な条件が、背景にあると思うのです。そういうものが、桜を人々にひじょうに親しませたのではないかと思うわけです。

もう一つ大事な問題として、当時の貴族階級の生活習慣が関わってきます。宮中では春がやってくるといろいろな行事を行ないました。その中に「花の宴」という行事もありました。これは、中国の風習が朝鮮半島経由で入ってきたものですが、中国文化に親しんだ平安朝初期の天皇とか貴族階級は、好んでこの花の宴を行なったのです。初めのころは、いまの太陽暦で言って二月の半ばから末ぐらいにやったのですが、そのころ咲いているのは梅の花です。ですから、梅が咲く時期に人々が集まって、歌を作ったり、漢詩を作ったり、舞いをしたりして春の到来を寿いだわけです。

ところがこれが、ある時期からずれてきたようです。三月三日、あるいはその近辺で花の宴をすることが多くなっていきました。三月三日というのは、現在の暦になおすと四月の半ばにあたります。この時期の花の宴になると、もう梅の花は散っているはずですから、明らかにこれは、桜の花の宴になっていたわけです。もっともこれは、京都を中心とする地域の行事なので、たとえば北国の場合では状況が大いに違うわけですが……。

いずれにしても、宮廷社会の美学では、梅から桜への入れ替えが行なわれ、桜の花が主役になってゆくのです。和歌の世界でも、花と言えばまず桜を意味するようになり、平安朝最盛時以降の和歌を解釈するときに、花という言葉が出てきたら、だいたい自動的に桜を意味すると読

んでもよい歌がふえてきます。

平安時代の末期に西行という大歌人がいます。彼は桜の歌を生涯に二百数十首残していて、桜の歌人としても有名です。この西行の歌に、

春風の花を散らすとみる夢は
覚めても胸のさはぐなりけり

というのがあります。この歌は西行の桜の歌の中でも傑作の一つだと私は思っていますが、意味は、春風が桜の花を散らしている夢をみた、それが惜しくて、夢から覚めても胸がまだ騒いでならない、とするのがふつうでしょうし、それで別に間違いではありませんが、これではとりたてて面白くもないし、なぜこの歌が特別に愛されてきたかの説明もつきません。

私は、西行のこの歌は、花がすごい勢いではらはらと散っている、その散ること自体に胸騒ぎすると言っているところに着目すべきだと思うのです。つまり、豪勢に散っていくその花が胸が躍るほど美しい、と見る西行の〝眼〟が大切なのです。花は散るときには散る、その散る姿を見て、それがあまりにも美しくて*呆然とする、この歌のポイントはそこにあると思うのです。

これは単に「散る」ことを*賞でるのとは違っています。花が散ることを惜しむ気持ちは、誰でも同じですが、しかしそんなことを惜しんでみても、それは、詩にはなりません。散っていく姿そのものが言葉を失うほどに美しい、そこが詩になるのです。花が散っている姿そのものの、あまりの美しさにわれを忘れて*見惚れている、これは、そういう意味で名歌だと思うのです。日本人は花というものを見るとき、咲いている姿だけでなく、それが散る姿においても見ることを好みます。これが一つのものの見方にまで高まったのが平安朝の末期ごろからだと思うのですが、それを*象徴する歌としても、この歌はたいへん意味があるでしょう。

（大岡信「みち草」による）

〔注〕

尊崇されて……とうといものとして、うやまわれて。
集大成した……たくさん集めて一つにまとめた。
邸宅……やしき。大きなすまい。
称えて……ほめて。
比喩的に……似たものにたとえるように。
豪勢に……ぜいたくで、はでに。
風情……ようす。ありさま。
春風駘蕩とした晩春……のんびりとした春の終わりごろ。
億劫な……めんどうな。めんどうで気がすすまない。
宮中……皇居の中。天皇の住まいの中。
花の宴……季節の花を観賞しながら、多くの人が飲食して楽しむ会。
漢詩……中国の詩。また、その形にならって日本で作った詩。
到来……やってくること。
寿いだ……祝った。
宮廷社会の美学……天皇や貴族を中心とする社会における美に関するこだわり。
解釈する……理解する。
呆然と……あっけにとられてぼんやりと。
賞でる……ほめたたえる。
見惚れて……見てうっとりして。
象徴する……具体的なものとして表現する。

[問題1]

筆者はこの文章で古代の日本の人々にとって「梅の花」と「桜の花」が、素晴(すば)らしい花だったと述べています。「梅の花」はどういう点が素晴らしいと言っていますか。「桜の花」とのちがいがわかるように、百字以内でまとめなさい。なお、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。答えは、一ます目から書きなさい。

[問題2]

筆者はこの文章の中でとりあげている西行(さいぎょう)の桜の歌が特別に愛されてきたことについて、どのように説明していますか。百字以内でまとめなさい。なお、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。答えは、一ます目から書きなさい。

[問題3]

この文章の中に「そういうものが、桜を人々にひじょうに親しませたのではないかと思うわけです。」とありますが、現代の私(わたくし)たちは、桜とどのように親しんでいるとあなたは考えますか。この文章全体をふまえ、あなたの思い出や体験を必ず入れて、四百字以上五百字以内で書きなさい。

書き出しや改行などの空らん、記号（、や。や「」など）も字数に数えなさい。

R70
古紙パルプ配合率70％再生紙を使用

解答用紙　適性検査Ⅰ

［問題1］

10

20

100

［問題2］

10

20

100

［問題3］

10

20

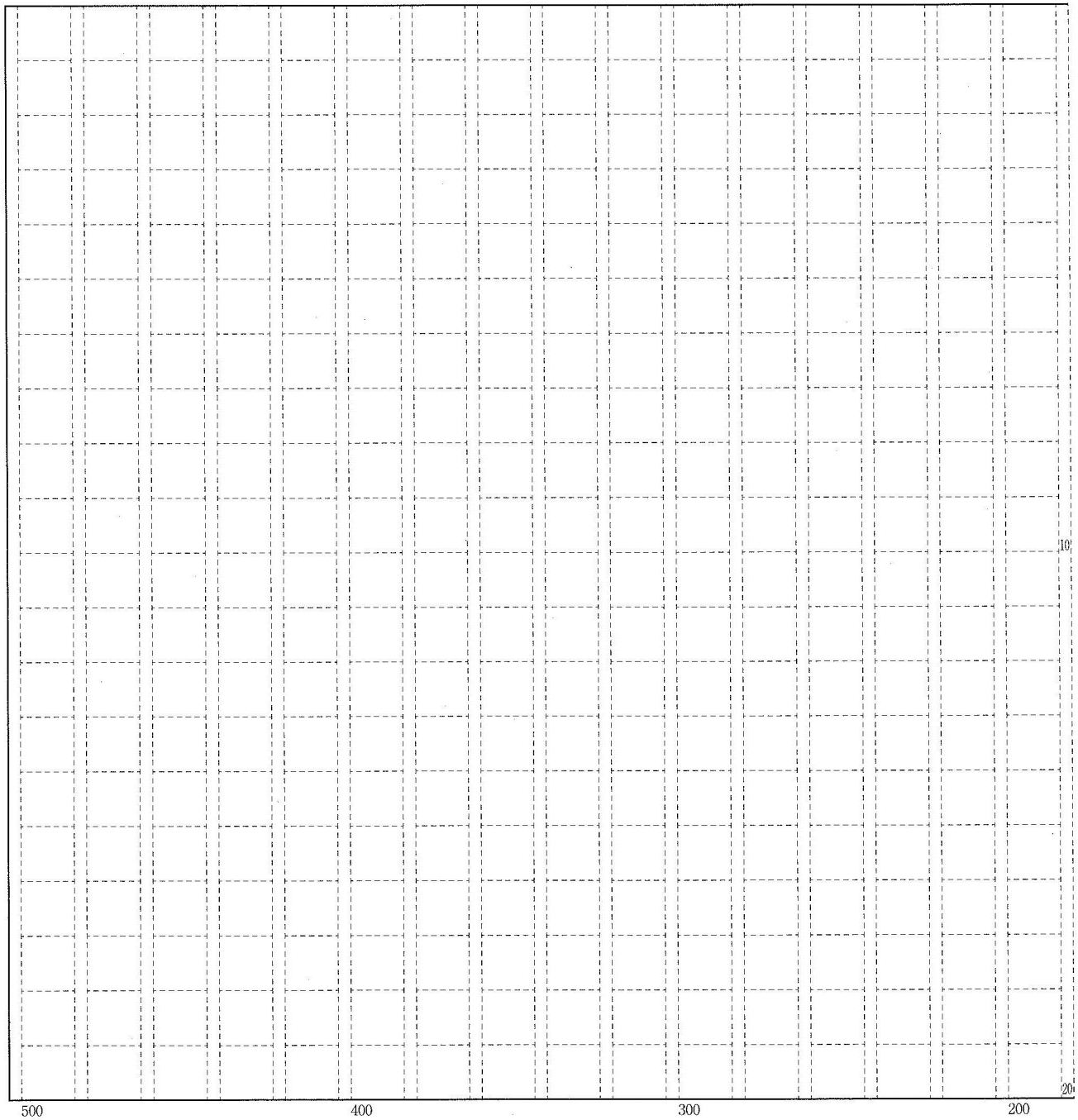
100

※

受検番号

※のらんには何も書かないこと

※　得　点



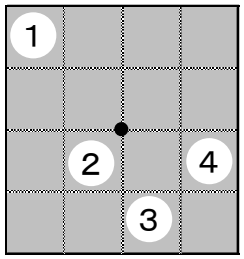
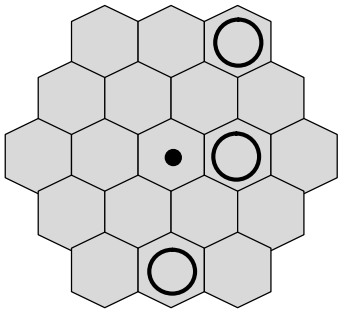
解答例

適性検査Ⅰ

［問題１］	梅の花と桜の花のちがいは、春のいつごろさくかという点です。桜は春の終わりごろにさきますが、梅は春を告げる最初の木の花です。春を待ちかねている古代の日本人にとっては、その点がすばらしかったのです。（９７字）	２０点
［問題２］	日本人は花がさいているすがただけでなく、散るすがたを見ることも好みます。西行のこの歌は、桜の花が散っていくすがたそのものが言葉を失うほどに美しいことを表していて、そういう意味で名歌だと説明しています。（１００字）	２０点
［問題３］	（省略）	６０点

適性検査Ⅱ

1	［問題１］	①固体　②液体　③気体	１５点
	［問題２］	水じょう気が地面の熱を上空に運ぶから。	１０点
	［問題３］	＜式＞ ８７７－３５＝８４２ ８４２÷１００＝８．４２ ０．６５×８．４２＝５．４７３ ３１－５．４７３＝２５．５２７ ＜答＞ ２５．５度	１０点
2	［問題１］	＜式＞ １８７８×０．１３＝２４４．１４ ２４４．１４×０．６３＝１５３．８０８２ ＜答＞ １５４人	１０点
	［問題２］	（イ）と（ウ） 日常的な買い物で自転車を使う人の中で、１０～１９分乗る人のわり合は３５％、人数が３４２人です。しゅ味で２０～２９分乗る人のわり合も同じ３５％ですが、人数は３９人です。比かくしてわかったことは、利用目的別の人数がちがうので、わり合が同じでも実際の人数は大きくちがうこともあるということです。	２０点

3	［問題１］	ＭＸＴＺＷＨＡＳ	１０点
	［問題２］	（1）  （2） あ さ た お し か こ そ き い せ え す く う け	１０点
	［問題３］		１５点